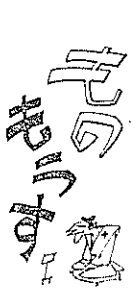
## お茶の間




### 労働銀行誕生
# 農家の労働解消への新らしい試み

十月号のある農業雑誌は鹿児島県大浦町にできた労働銀行の記事を載せている。

この町に労働銀行ができたのは昨年の七月。ねらいはいうまでもなく農家の労力不足の解消と、農業の質的向上にある。

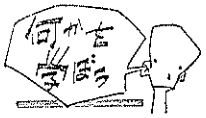
加入者同志で労力を預けたり借りたりするのがたてまえだが労力のあまっている時には、外部からの要請があれば出かけてゆく。銀行の力を借りたい人は仕事の内容と分量とを書って申込むと、銀行の支配人はメンバーの家を回って都合を聞き、あいている者はすぐこれに応じる仕組みになっている。

作業にでた時間数は加入者同志のばあいも、外へ出勤したばあいも、作業が一段落した時に清算する。よけい働いた人は賃金を受取り、よけい働いてもらった人は賃金を支払うわけだ。

以下すこし具体的な内容に触れてみると、銀行の仕事の主体は組合員相互の作業を共同で行なうことにあるが、しかしそれぞれに経営面積はまちまちで労働力を預けっぱなしで引きださずにすむ人もいれば、自分が預けた分を遥かにうわ回る人もいるし、共同作業日に平日しかでれない人もいると言合せたことである。

ある工場へ日本人が見学に行ったとき工員がパンを食べつつ機械を使っているのに驚き、たづねてみると食事時間をおしんで働いていると答た。その結果が今日の西ドイツである。優秀な製品が安くでき、ドルが外貨が入ってきて困っている、日本は栄えているとはいえドル不足の心配は常にしていなければならない。

理くつだけではどうにもならぬ、働いて初めて繁栄がある。




### 西ドイツ発展の鍵

第二次大戦後日本もドイツも破壊され国力も大変弱くなった。日本は先づ住宅に娯楽に金をつぎ、ドイツは工場に金をつぎこんだと。ある学者がいった。

西ドイツの労働者は戦いが終ると同時に、家は雨漏りがしても工場の機械には思切って金をつぎこんだ、そして偉いことは、国力が回復するまで賃上げはなるべくせずストライキはしないと資本家でなく労働者が申したぐあいなので、労働銀行で働くばあいの賃金はすべて時間給にしている。一時間当り五十五円。それに五円の接待費がついて六十円。一日八時間働けば四百八十円の勘定。

一時間五円の接待費はいわばおやつ代。これさえだせばお昼のべんとうはもちろん、三時のおやつをだす必要もなく、お茶さえも各自が魔法瓶に入れて持っていくと言ったぐあいで、雇い入れる側は接待の手間は全然いらない。

またパートタイム制だから、都合次第で働きたいだけ働いて帰ればよいのだから、余分な束縛をうけることはない。

この銀行の第一のねらいは不足の解消にあることはもちろんだが農協や役場ではこの銀行を中心に新らしい農業経営の足固めを行なうことに努めているようである。

すなわち、集団栽培によって省力技術を普及し、全体的に栽培技術の向上を計るための訓練の場を銀行の組織に求めている。

いま学力不足に喘いでいる農村うるほいのない日の土との対決の場に於て、労働銀行の誕生は一歩前進した試みと言うべきであろう。そしてこの試みはみごとに成功しているようだ。

毎月20日
**無料人権相談所**
中町公民館

**シールは回収箱へ**
少年補導センター

## 募集

ことしを回顧する意味で、広く一般の市民から写真や、マンガを募集します。

写真は、キャビネ版、締め切りは十一月末日まで、題材は自由ですが、できればことし市内で行なわれた行事や、市が行なった事業を撮つしたものを歓迎します。

なお、市歌や、市の音頭も募集する予定でありますので、いまから想を練っておいてください。